

## 一人ひとりのおもいに寄せて明日への一歩をともに ～芹が谷やまゆり園が目指した新しい入所施設の在り方～

芹が谷やまゆり園  
石井 雄祐 草野 一樹  
高橋 夏穂 中川 波美

### 1. 理念とは

理念とは、辞書で検索すると「ある物事における根本的な考えを意味するもの。」とあり、簡単にまとめてしまうと「目指すべき方向性。」である。

### 2. 社会福祉法人かながわ共同会の法人理念

社会福祉法人かながわ共同会の法人理念は、「誠実と信頼を旨とし、人権に根ざした利用者本位の考え方にたち、多様なニーズに対応する支援体制の整備、サービスの量的、質的充実につとめ、利用者地域社会の繁栄に貢献するとともに社会的な法人としての価値を創造していきます。」となり、これが法人が目指すべき方向性である。

### 3. 一人ひとりの「おもい」に寄せて明日への一歩をともに

芹が谷やまゆり園の運営開始時に、改めて当園(芹が谷やまゆり園)の目指すべき方向性を整理する必要性があった。そこで、法人理念(見出し番号 2. の内容)に芹が谷やまゆり園の役割・特徴・強みにかけ目指すべき方向性を整理すると、【一人ひとりの「おもい」に寄せて明日への一歩をともに】と言ったコンセプトができた。この、コンセプトに併せた園運営をしていくことは、法人理念を元に作成しているコンセプトの為、法人理念の実現を目指していくことである。

また、このコンセプトを各職員が業務・支援場面で意識・実践していくことを当園では取り組んだ。

実際には、簡単な話しではないが、少しでも職員が意識をしていける様、芹が谷やまゆり園では、このコンセプトについて意味合いの理解や整理をする研修、意見交換を行なってきた。

一人ひとりの「おもい」に寄せて明日への一歩をともに。研修や意見交換では、このコンセプトに込められた意味合いを一つ一つの文節に分けて、整理、確認、理解が出来る様に取り組んだ。以下、芹が谷やまゆり園として、共有してきた文節ごとの意味合いを説明していく。

### 4. 一人ひとりとは誰だろう

芹が谷やまゆり園にとっての一人ひとりとは、誰をイメージするか。芹が谷やまゆり園では「入所施設」「生活介護」「短期入所」と言ったサービス提供をしている。とすると、一番初めにイメージできるのは、サービス利用契約を行なっているユニットにいる利用者さんである。

しかし、本当にそれだけが一人ひとりと言えるのか。今は、サービスと繋がっていないが、芹が谷やまゆり園を必要とされている方は、日々、地域サービス課で受ける電話相談などからたくさんいると考えられる。同時に、必要と思われる施設であることが大切である。法人理念(見出し番号 2. の内容)には、「多様なニーズに対応する」「地域社会の繁栄に貢献する」とある。今は、サービス利用契約はしていないがこれから必要として下さる方、例えば、地域で暮らしていてレスパイトやボランティアとして活用した

い方等この様な方々を含め一人ひとりである。と整理・理解・共有をしてきた。繰り返しの確認となるが、法人理念には「多様なニーズに対応する」「地域社会の繁栄に貢献する」と目指すべき方向性が記載されている。そして、これらに向き合い、「社会的な法人の価値を創造する。」とも記載されている。その様な理念の文言も、一人ひとは誰かを整理する上で手掛かりとした。

## 5. 「おもい」に寄せるとは

一人ひとりの「おもい」を知り、「おもい」に寄せる過程の一つが意思決定支援である。また、そのためには本人を「知る」必要がある。芹が谷やまゆり園のコンセプトである「おもい」に寄せての実現には、「知る」と言うことは欠かせないことである。

簡単な説明とはなるが、本人を「知る」ために日々の支援や関わりから見られる本人の反応、(例えば、ジュースを買いに行ったら、笑顔で大きく両手を挙げていた。)などの本人の反応を大切にしていこう。

日常場面、イベント場面、社会生活場面これらの様々な場面での本人の反応を記録・蓄積し、本人の好き、嫌い、選好等を分析した。その中で、見えてきた本人像、特に好き、嫌い、意思決定の力等を独自のアセスメントシート(芹が谷やまゆり園では、手掛かりシート)にまとめて、整理をしてきた。また、利用者のアセスメントシート欄の好きな食べ物の項目が、何年、何十年と変わっていない事など多く見られていた。悪いと言ったことではないが、何年、何十年経っている間に利用者の好みも変わっている可能性がある。例え話とすると、昔はお肉が好きだったが、年齢も重ねて来て今は、魚が好きと言ったこともあると考えられる。その様なことを考えると、好きな食べ物が変わらないくらい変化がなかった、知っている様で知らないことがあると言ったこともあるのではないかな。

## 6. 明日への一歩をともに

「一人ひとりのおもい」に寄せて日々利用者さんの方々と当事者さんの方々と関わり支援をさせていただくと、「散歩時に猫を見かけた際、すごく嬉しそう。」や「自信を無くしてしまった。」等様々な思いに触れたり、「こんなことも出来たんだ。」や「こんなことも得意なんだ。」等様々な可能性を感じる部分がある。それらの中には、実現には施設では難しい、職員だけでは難しいと言ったことがある。

例えば、「毎週末コンビニに行きたい。」「毎日家族に会いたい。」これらの「おもい」は園の中の支援や職員だけの支援では叶えられない。難しい、我慢して欲しいと言った場面がある。結果として、「来月にしましょう。」「次の順番を待ちましょう。」と伝え、今もなおあきらめたり、制限してもらっている場面は、多々見られている。

しかし、改めてコンセプトは「おもい」に寄せる。そのために、明日への一歩をともにすることである。仮に本人が毎週末コンビニ、毎日家族に会いたい。に対しての明日への一歩は諦めてもらうことなのか。その様な考えだけでは、コンセプトからずれてくると考えられる。

本人の「おもい」を施設や職員の出来ることで枠組みする必要はない。しかし、現実的には施設や職員だけで全てを叶えるのは難しい。出来るのなら我慢や制限も必要ない。また、叶えたくても「今」は難しいと言った場面もある。

本人のおもいを叶えるために、毎日、担当職員が出勤してやるのか。職員もユニットの業務、記録、委員会などがあり現実的には困難だ。では、あきらめるのか。その様な動きでは、今までの施設の在り方と変わらない。

明日への一歩を歩むためにどうするかを考え、実現を目指す取り組み。それが、芹が谷やまゆり園のコンセプトだ。施設や職員では出来ないならどうするか。今のサービスだけでは出来ないならどうするか。法人理念にもある「支援体制の整備」「サービスの量的、質的充実」が根拠となり、作って行く。その様なことを、コンセプトの「明日への一歩をともに」に込めた。

## 7. 事例に入る前に

改めて、以下の取り組みが、一番伝えたいことである。芹が谷やまゆり園のコンセプトを元に「おもい」をどの様に叶えて、寄り添い一歩を歩んできたのか。ここからは、実際の事例を元に紹介していく。

### 8.Aさんの事例(有償ヘルパー外出)

生活2課で生活しているAさんの事例。

現在、Aさんは有償ヘルパーと一緒に外出する事を、月に3回ほど行なっている。Aさんは、外出や近くの公園に散歩に行くなど、今まで様々な経験をしてきた。日々の生活の中で関わっていると、Aさんは「話を聞いて欲しい」「車や猫が好き」「もっと自分を見て欲しい」などの思いが見えてきた。

しかし、当時は出掛ける際、他の利用者さんとの外出の順番を待つ、調整できても月に1度と言った外出状況であった。改めて、ご本人と外出をして大きなペットショップへ行った際、満面の笑みで笑っていたことや笑顔で他者に挨拶をする、話しかけるといった様子を見て、もっと好きな猫に会えたら、もっと人と関わることができたら、ご本人は楽しめるのではないかと思うようになった。

では、その思いに寄り添う為にどうしたら良いのか。毎日担当職員と一緒に出掛けるのか。職員を辞めることで他者としてご本人と関わるのか。その様なことは、現実的ではなく、職員も疲弊してしまう。今までは、施設で出来ないことは、難しい、だから代替えの案をといったことが多くあった。

また、健康面において、てんかん発作があると言った配慮点や、情緒面でも興奮すると他者へ手が出ることもあり、職員以外の方がAさんと2人きりでは、相手も驚いてしまうかもしれない、ご本人も緊張してしまうのではないかと、言った職員の声も聞かれていた。しかし、本人の思いに寄り添い、支援員以外で人と関わることが出来ないかといったことを、相談支援専門員などと議論を重ね、施設の域を超えて支援を考える様になった。そして、支援員以外で人と関わり、密な時間を過ごせるよう、有償ヘルパー(以下、ヘルパーと記載する。)を導入することとなった。最初の段階として、Aさんは1人でヘルパーを利用するのではなく、ユニットの職員が付き添いを行ない、一緒に外出することでご本人の好きな事、苦手な事、健康面の配慮など口頭で引継ぎを行なった。2022年現在でも、ご本人とヘルパーを繋ぐことは大切にしており、都度、双方で引継ぎを行なう様にしている。

この取り組みが継続している事で、ヘルパーの顔を見ると「出掛けてくれる人」と言った意識があるのか、笑顔で駆け寄り、楽しみにしている様子も見られている。初めは、ヘルパーの肩に手を置き歩かれていたAさんだが、今では自らヘルパーの手を引いて外出を楽しんでいる様子が見られている。課題としては、ヘルパーの活用にお金がかかる、施設入所では使えるサービスが限られてしまうと言ったことが挙げられる。また、この取り組みを繰り返し行ない、その中でご本人の思いが膨らんで来るほど地域を目指していくと言った意味合いにも繋がってくるのである。

### 9. Bさんの事例(外部資源の活用)

生活2課で生活しているBさんの事例。

Bさんは現在、一人暮らしに向けて外部資源を活用している。Aさんの事例と同様、今までの丁寧な関わりや本人を知ることを積み重ねていくと、Bさんは「大人の女性になりたい」「社会人になりたい」と言ったおもいがあった。

おもいはある反面、様々な刺激が苦手で、施設の中でも支援が難しいBさん。そんなBさんの「大人の女性になりたい」「社会人になりたい」と言う思いに、向き合い切れない部分があった。では、改めて「ご本人の思いに寄り添うにはどうしたら良いのだろう。」と考えていた際、大人の女性になるため、社会人としての一歩として、経験や体験が必要なBさん。その経験や体験を充実させるために入所している施設

以外での経験が必要である。

また、この B さん。色々なことが気になってしまう方だ。刺激が強い外部の環境、ユニットに帰ってきた後、気持ちの切り替えが出来ないのではないかとといったことや、園以外での経験は難しいのではないかと、そんな意見も多くあがっていた。しかし、難しいから諦めよう、我慢しよう、仕方がないは芹が谷やまゆり園のコンセプトとはずれてしまう。

もう一度、芹が谷やまゆり園のコンセプトを思い出して見ると、施設だけで解決するのではなく、どうしたら施設以外での過ごし方の経験が出来るのかと言った視点でご本人の再アセスメントを行ない、その結果としてコンサルテーションを活用した。

環境と支援の見直し、支援手順書や絵カードでの提示など、ご本人に合ったコミュニケーションツールの活用、それを外に持ち出せるように整理した。様々な経験を通じて、今では一人暮らしがしてみたいと言う思いがある B さん。その経験に向けて様々なことを整えている状況だ。

その道のりの中に家族との歩み、支給決定、行政の理解、チーム内の考え方、様々な要素がある。時には、壁にぶつかることもあるが、そんな時こそコンセプトに戻り、方向づけをし直して行けると良い。一人暮らしに向け B さんが別の施設を利用する際、1 ヶ月以上前から経験や体験についての引継ぎを行なった。前日に現在、ユニットの職員が行っている支援の引継ぎや受け入れ環境を整えるため、実際に受け入れ先に行きカードや作業をセッティングし、支援方法を丁寧に引き継いだ。

2人の「おもい」に寄せるために様々な所と繋がり、チームの中でたすきを繋げていく。分かりやすい例えとして駅伝が挙げられる。今年の箱根駅伝のキャッチコピーは「おもいをつなぐ」まさにぴったりなスローガンなので例えとして紹介した。

## 10.Cさんの事例(ボランティアとしての活用)

地域で暮らしている C さんの事例。

きっかけはある一本の電話からだ。その内容は「横浜市内の事業所に通っているのだが最近、通えなくなってきた。」「自信がなくなりました。」という相談である。C さんは障害程度区分5と最重度の利用者さんが暮らす芹が谷やまゆり園が提供するサービスに合う方ではなかった。しかし、話しを伺っていく上で「自信を取り戻したい」「自信をつけて再び事業所に通いたい」という思いがあった。芹が谷やまゆり園として何が出来るかを考えた。幸いなことに芹が谷やまゆり園にはたくさんのボランティアの方々が入園し活動していただいている。そこで、ご本人に「ボランティア」として登録してもらい、他のボランティアの皆さんと一緒に活動してもらおうという提案をさせていただいた。初めてのボランティア活動日の、相手は衣類補修のボランティアさんである。お互い緊張していたが、お茶やお菓子を食べながらお話しすることから始めた。

「どんなことができるかな」「得意なことは」「好きなことは」とボランティアさんが聞き出してくれると「手先が器用」「はさみを使える」ということがわかったのだ。「では布をはさみで切ってもらいましょう」ということでボランティアさんにサポートをしていただき、大きな布を切ってゆく C さん。その布を綺麗に切ることができていた。すると、ボランティアの方から「上手に切れたね」と褒められる場面が見られていた。C さんは、うれしそうな様子だった。

その後も、月1回ほどのペースで衣類補修のボランティアと交流した C さん。参加するたびに与えられた役割を果たして称賛する言葉ももらい、自信も少しずつついてきたようで笑顔で過ごすことが多くみられるようになった。また、毎回活動が終わるたびに職員と振り返りを行なった。「今日なにをしたか」「楽しかったこと」「困ったこと」をご本人に紙に書いてもらい、職員と次の活動について話し合いを行なった。その中である日「違う活動もしてみたい」と自発的な発言が聞かれた。「では美化清掃のボランティアさんを紹介しましょう。興味はありますか」と職員が聞くと、ご本人より「やってみたいです」と言った返答が聞かれるようになった。少しずつ自信がついた C さんは、新しい活動に自らチャレンジできるようになった。

11月に芹が谷オータムフェスと題して園祭を企画していた芹が谷やまゆり園イベントの出演者が、な

かなか決まらなかった時、Cさんとの何気ない会話から「ピアノが弾ける」と教えてもらった。「では園祭で披露してくれませんか。」と職員が聞くと、ご本人より「やります。」と快く快諾してもらった。

そして園祭当日、大勢の人々の前で堂々とピアノを演奏するCさん。最後までやり遂げることができ、たくさんの方から拍手喝采を受けて少し照れくさいような、でもどこか誇らしげな表情が印象的だった。

ピアノ演奏後の振り返りをボランティア担当職員と行なっている。担当職員より、ピアノ演奏に対する感想などを聞いていると、ご本人より家でたくさん練習したことや自信があったと言った話があった。

## 11.まとめ

「おもい」に寄り添って明日への一歩をともにしていくと、「おもい」はどんどん変化して行く。

下記の図が活発になることで一人ひとりの望む生活へ近づいていく。自身の事業所だけでなくチーム(他の事業所など)でやって行く、繋ぐ・繋がる動きが大切である。

